あたたかな人間関係を育む学級づくりの在り方

－日常生活における共通目標の実現を目指す活動を通して－

教職実践応用領域　　学級づくり　　荒木　さとみ

Ⅰ　はじめに

1　研究のねらい

「生活体験の不足や人間関係の希薄化，集団のために働く意欲や生活上の諸問題を話し合って解決する力の不足，規範意識の低下などが顕著になっており，好ましい人間関係を築けないことや，望ましい集団活動を通した社会性の育成が不十分な状況も見られる。」

これは，平成 20 年１月の中央教育審議会の答申で指摘された特別活動の課題の一文である※1。

子どもたちが，これから生きていく複雑で変化の激しい社会。情報化，都市化，少子高齢化など社会状況が大きく変わる中で生きていくためには，学校教育において，人間関係の形成を図り，集団活動を通して社会性を身に付けることの重要性を警鐘している。

学級は小社会である。だからこそ私は，この小学校の段階からあたたかな人間関係を育むことができる児童を学級活動を通じて育てていきたい。あたたかな人間関係を育むことができる児童とは，『互いに信頼し支え合うことができる児童』と考える。そのような児童を育てるためには，所属する集団（学級）に対して，「私が困っているときは，学級のみんなが支えてくれるし，私も力の及ぶ限りみんなの支えになって役に立ちたい」という意識を常に持ち続けることができるようにしていくことが大切である。

2　人間関係の形成を必要とする背景

今，世界は，情報や文化・人との交流がボーダーレスになっている。異なった文化・価値観といった多様な背景をもつ人々の集団や社会の中で，他者と共に学び，生活し，働くことが求められる。型にはまった行動ではなく，相手に合わせて行動を変えなくてはならない。多文化の人々が共に生活せざるを得ない世の中で，現代のような希薄な人間関係の中にいる子どもたちは生きていけるのだろうか。

OECD（経済協力開発機構）の DeSeCo では，こうした社会で生きるために必要な能力として定義した「キー・コンピテンシー(鍵となる能力)」※2について，その考えを示している。日本でも，新学習指導要領で示す「生きる力」は，この「キー・コンピテンシー」の考えを先取りしたものであると規定しているように重視している。この能力は次の三つのカテゴリーに分類している。

A　相互作用的に道具を用いる
情報技術などの物理的なツールと，言語の使用など社会文化的なツールの両方を効果的に活用する能力

B　異質な集団の中で交流する
相互依存関係が強まる世界において，様々な人々が存在する集団においてもうまく交流していく能力

C　自律的に活動する
個人が自分自身の生活を管理する責任をもち，社会的状況の中で生活を自ら定め，自発的に行動する能力

人は，多くの人とのかかわりから学ぶ。この３つの能力を育てるためには，人とのかかわり，すなわち人間関係形成能力が不可欠である。したがって，小学校時期には３つの能力を育てていくことを重視するよりも，これらの能力を育てるための基盤づくりとしての人間関係形成能力の育成を行うことが重要であると私は考える。

低・中学年のうちは，同じ学級集団の中での人との交流を図る能力を育てる。小グループの低学年から学級全体の交流を図る中学年といったような段階を追った指導が必要となる。高学年では，同学年だけでなく，異年齢集団との交流によって，人とのかかわりを深め，人間関係形成能力の基盤を培うことが，その後の「キー・コンピテンシー」の育成に役立つと考える。

3　本校の現状

(1)　本校の様子

本校は，名古屋市港区の西部に位置し，周囲は田園に囲まれたのどかな地域であり，児童は明るく伸び伸びとしていて，校内の諸活動に対して積極的に取り組んでいる。また，地域の方や保護者は，本校の学校教育に対して，大変協力的な姿勢が見られる。

しかし，学級数が少なく（９学級），転出入も極めて少ないことから，児童は幼い頃から互いを知り尽くしている。そのことから，児童の人間関係が固定し，一度人間関係でつまずいてしまうとその後うまくいかないこともある。また，それぞれの児童の立場が定着していることで言わなくてもいい，あるいは，言いたいことが言えない雰囲気があるのが現状である。

(2) 学級の実態

本学級（3年1組）の児童は26名（男子14名，女子 12 名）から構成されている。明るく元気いっぱいで子どもらしく人懐っこい子が多い。協力して活動することを前提とした楽しい集会活動では，みんなで協力して行うことができる。しかし，ひとたび集会が終わり，日常生活に戻るとケンカが起きたり，困っている人を助けることができなかったりと，協力し合う姿があまり見られない。その点でも，あたたかな人間関係を育むことが必要であると考えた。

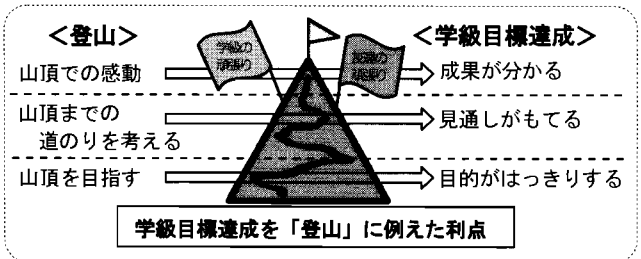
4 これまでの研究と本研究とのかかわり

これまで私は，学級目標の実現に向かって集会活動を行い，その中であたたかな人間関係を育む研究を進めてきた。そして，次のようなことが明らかになった。

＜目標の見通しの必要性＞

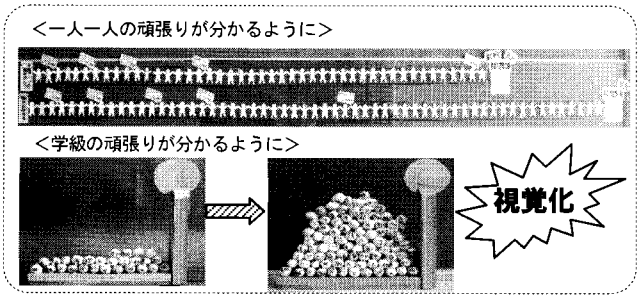
○ 児童全員に，自分たちが目指す目標に対して，共通イメージがもてる工夫が必要である。

○ 活動過程においても，成功の見通しをもつことができる工夫が必要である。

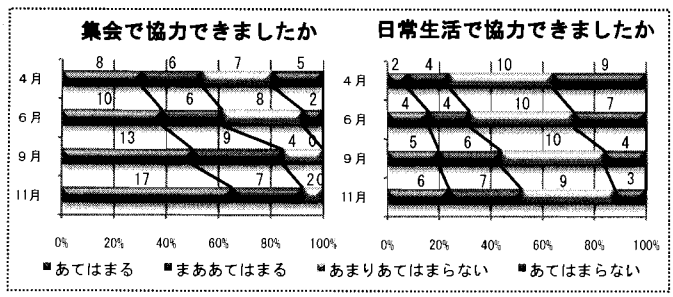


＜結果の実態把握の必要性＞

○ 活動意欲の持続，及び，向上を図るために，常に活動を視覚的に確認できる工夫が必要である。



上記のような手立てを取り入れたら，成果があったが，次のような課題があがった。以下は，昨年度の担任学級(2年生25名)のアンケート結果である。



以上の結果から，目的意識や意欲をもたせた集会活動では協力し合えるようになったものの，それ以外の場面である日常生活では協力できていない実態が分かる。これは，特別な場合だけ行い，目に見える形で結果が表れ達成感が感じられる集会活動と違い，日常生活では毎日のことであり達成感が感じられず結果が見えにくいことが原因であると考えられる。

したがって，日常生活の場面でも，学級の集会活動と同様の実践が必要である。そして，その実践を行うことによって，児童が知らず知らずの間に互いに信頼し支え合えるような人間関係を育んでいけるようにしたい。

Ⅱ 研究の方法（研究対象：小学3年生・26名）

＜基本的な考え方＞

今まで述べてきたように，集会活動で生まれるあたたかな人間関係を，学級生活の大半を占める日常生活においても反映させることが課題となった。日常生活こそが学級内の小社会であり，子どもの本来の姿である。そこでの人間関係を育むことが，社会に出たときに必要な人間関係形成能力の基盤を培うことができると考える。

そこで，常時活動（当番活動や朝・帰りの会）や主体的・自治的に行う活動（係），自由な活動（休み時間）の場面などの日常生活でも，目標を話し合ってつくり，その実現に向かって学級全員で取り組んでいく。そして，日常生活の場面においても，「互いに信頼し支え合うことができる児童」を育て，あたたかな人間関係を育む学級をつくっていきたいと考えた。そこで，対象児童を3年生とし，以下のような考えに基づき，研究を進めた。

> **特別に取り上げる場面（例：集会活動といった場面）だけでなく，日常生活の場面でも全員で話し合って決めた目標を実現させていくことで，互いに信頼し支え合うことができる児童が育ち，あたたかな人間関係を育むことができる。**

1 共通目標づくり ＜目標の見通しの必要性＞

本研究では，「互いに信頼し支え合うことができる児童」を育てるために全員で話し合って目標をつくる（以下，これを『共通目標』という）。目標実現に向けて話し合い，活動する中で，考えを理解しようと歩み寄り，互いに信頼し支え合おうとする姿が生まれていくようにした。

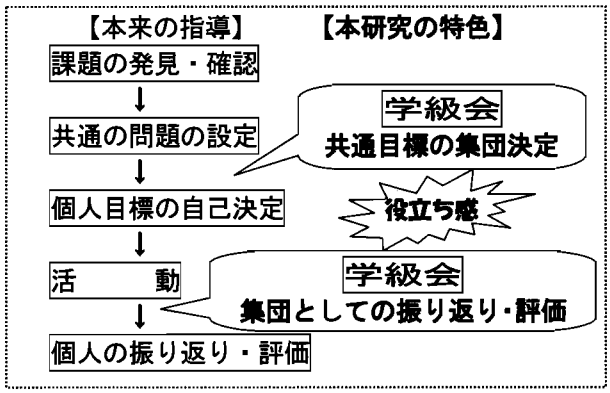
児童の心理的結び付きは，同じ目的に向かって協力したり達成感を共有したりするときに強くなることは，今までの実践から明らかである。それが学級目標になる。建前ではなく全員が納得し，実現したいという気持ちを強くさせていくことが大切である。そこで，次のように学級目標を作っていく。

○　できるだけシンボル化した目標にし，どの活動も絶えずシンボル(目標)に関係付けて行う。
○　より実態に合った目標にするため，１か月間一緒に生活してからつくる。
○　ブレーンストーミングで願いを出し合い，ＫＪ法で集約し，全員の願いが詰まった目標にする。

2　行動の共通目標づくり<目標の見通しの必要性>

本来，特別活動の「(2)日常の生活や学習への適応及び健康安全」は，集団での話合いを通して，個人の目標を自己決定し個人で実践するものである。しかし，個々に目標があるので，同じ方向性を共に目指すという意識が低い。そこで，同じ方向性を目指すことで，自分の経験は友達に役立ち，友達の経験も自分に役立つことがわかるよう学級内での役立ち感を高めていき，互いに信頼し支え合う関係をつくっていきたい。

そこで，日常生活の場面でも「力を合わせて頑張ろう」「困っている人を助けるんだ」と役に立ちたいという思いを高め，信頼し支え合えるように，個人目標を立てる前に全員で話し合って共通目標をつくり，その実現に向けて活動していくことにした。



3　研究を具体化するための手立て

(例) 学級オリンピック集会

活動①要因を話し合う　集会での経験！

集会でのよかった点		要　因		目指す学級目標
○　やりたくなさそうな子を誘った	→	要因Ａ　声を掛け合ったから	←	励まし合う
○　男女が仲良くできた	→	要因Ｂ　話し合ったから	←	仲良くする
○　みんなで準備や片付けができた	→	要因Ｃ　一人一人が頑張ったから 要因Ｄ　できない人を助けたから	← ←	協力する 思いやり

日常生活で生かす！

活動②　日常の場面でどの要因を行動目標にするか話し合う

活動③　具体的な行動の共通目標を決める

日常生活の場面	要　因		みんなで決めた行動の共通目標
係活動	要因Ｂ　[話合い]	⇒	同じ係同士話し合って活動する
	要因Ｄ　[助け合い]	⇒	係の人が困っていたら手伝う
清掃活動（当番）	要因Ｃ　[一人一人の頑張り]	⇒	自分の仕事は責任をもってする
休み時間	要因Ａ　[声の掛け合い]	⇒	誘い合って遊ぶ
	要因Ｂ　[話合い]	⇒	もめたら，話し合って解決する
朝・帰りの会	要因Ａ　[声の掛け合い]	⇒	みんなに静かにするよう声を掛ける

活動④　活動を振り返る

役立ち感を高める

日常生活でのよい点		行動の共通目標		学級目標
○　他の係の企画を手伝っている人がいる	←実現→	係の人が困っていたら手伝う	←実現→	思いやり・協力
○　みんなで楽しく遊べるようになった	←実現→	誘い合って遊ぶ	←実現→	仲良くする

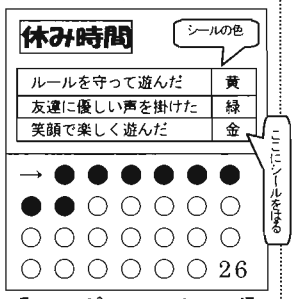
4　目標実現への視覚化<結果の実態把握の必要性>

自分が役立っていることや学級のために頑張っている友達の姿が分かるようにすることで，信頼し支え合うことができるようにしたいと考えた。

(1)　個人の頑張りが分かるカード

日常生活の場面（係活動，清掃活動，休み時間，朝・帰りの会）ごとにカード（コッポイントカード→COP[学級目標]＋POINTCARD）を用意し，話し合って決めた行動の共通目標に心掛けて行動したら，それを認めてくれた友達にシールをはってもらう。（目標の内容ごとにシールの色を変える）カードは個人持ちで，自分が学級のために活動で

きていることが分かるようにした。また，コッポイントカードに26枚シールがたまったら，教室に掲示し，だれがどの場面で頑張っているかが分かるようにした。さらに，事前に何枚たまったらどんなお祝いをするか決めておき，カードがたまったら学級全員でお祝いをし，意欲を高めることにした。



【コッポイントカード】

1	2	3	4	お祝い
コッポイントカード 係活動	コッポイントカード 係活動	コッポイントカード 係活動	コッポイントカード 係活動	コッポイントカード 係活動
コッポイントカード 休み時間	コッポイントカード 休み時間	コッポイントカード 休み時間	コッポイントカード 休み時間	

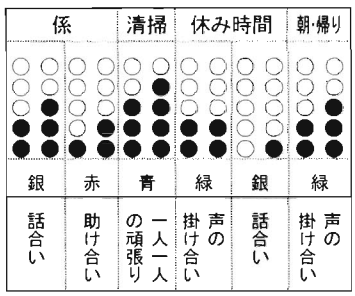
【コッポイントカード集計表】

(2) 学級の高まりが分かる教室掲示

ア．日常生活の場面別集計グラフの掲示

個人で持っているコッポイントカードを，日常生活の場面別（係活動，清掃活動，休み時間，朝・帰りの会）でシールの数を集計し，それをグラフ化したものを教室に掲示する。

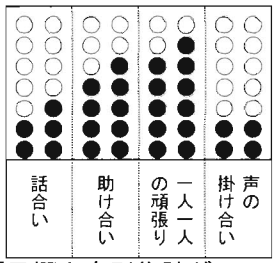
どの場面で行動の共通目標が実現しているかに気付くことができるようにする。



【日常生活の場面別集計グラフ】

イ．目標内容別集計グラフの掲示

上のグラフは日常生活の場面別に集計するが，ここでは目標内容別にシールの数を集計し，グラフ化する。どの目標を頑張っているかが一目で分かり，学級目標に近付いているかが分かるようにする。



【目標内容別集計グラフ】

(3) 学級目標実現への視覚化

毎月１回，学級の誕生日会を開く。その日は学級の成長を祝う日とし，今の学級の様子もシートを使って振り返る。その際，学級目標の実現度が判断できるよう児童と話し合って実現度を作成した。

【振り返りシート】

０人…よくけんかをする
１人…自分のことを頑張ることができる
２人…仲良しの子と助け合える
３人…みんなで楽しく遊べる
４人…学級のために頑張り，困っている人を助けることができる
５人…みんな仲良し，協力し，励まし合っていて，いいクラス

【振り返りシートの学級目標実現度】

今の学級の現状を自分で判断し，評価した人数分だけ「振り返りシート」に描かれている人間に色を塗る。そして，みんなが今の学級をどう思っているか確認し合うことにする。

３　話合い活動

話合い（学級会）の中でも，互いの意見が認め合えるような話合いを重ね，「互いに信頼し支え合うことができる児童」の育成を目指していく。

また，学級会後には毎回アンケートをとり，個々や学級全体の様子も把握する。

Ⅲ　評価の方法

全体の評価についてはアンケートをし，クロス集計を行う。各実践については，視覚化させたカードやグラフ，児童観察や振り返りシートの記述などの方法で評価を行う。

Ⅳ　研究の内容

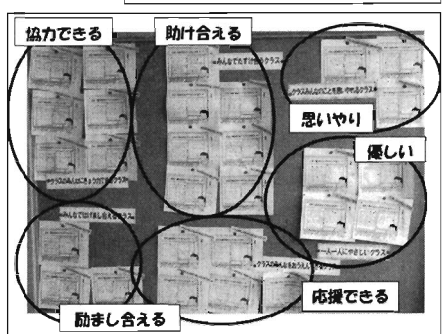
１　共通目標づくり（５月初旬）

(1) 学級目標づくり

今の学級のよい姿，よくない姿を具体的な場面で取り上げさせ，「そのような姿だからこんな学級にしたい」という願いがもてるようにカードに随時記入させた。

【学級の現状を記入したカード】

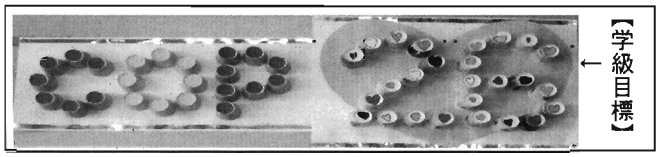
そして，児童が書いたカードを教師がＫＪ法で仲間分けをして教室に掲示した。みんながどんなクラスにしたいと思っているかが分かるようにし，１か月後，学級会で学級目標を決めた。



【ＫＪ法で仲間分けして掲示したカード】

全員の思いが「仲間と心までもつながる」ような「仲良しクラス」にしたいと一致し，「みんながつながる心がつながるなかよしクラス」という学級目標が決定した。また「COP10」が開かれることを知り，生物多様性の「生物はつ

ながり合って生きている」ということが，学級目標の心がつながると似ていることから，COPは「みんながつながる」という意味と考えて，26人みんながつながるように，「COP26みんながつながる心がつながるなかよしクラス」とキャッチフレーズが決定した。そして，毎月26日を学級の誕生日と定め，学級の成長を祝う会を行った。



←【学級目標】

(2) 行動の共通目標づくり（9月～12月）

励ましたり，応援したりすることで心がつながるクラスになれるということから運動会を行うことになった。そこでどんな運動会をするか話し合った。

学級会
[議題] 学級目標が実現する運動会を考えよう
[話合い] ①どの種目にするか ②チーム決め
[決まったこと]
①二人三脚リレー・・・息があって仲良くなれる
馬跳びリレー・・・・みんなが仲良くなれる
リレー・・・・・・・みんなで応援できる
ミニつなひき・・・・力と心が一つになる
障害物リレー・・・・オリジナルの障害がつくれる
②くじで決める・・・・どの子とも仲良くなるから

みんなでしたり，普段できないことをしたりする種目やどの子も活躍できそうな種目が提案され，上記の5種類の種目に決まった。

【敵チームでも助け合う姿】

運動会当日は，各チームが自分たちで決めためあてをしっかり守って楽しく行った。障害物リレーでは，チームの一人をおんぶして楽しそうに る姿が，二人三脚では，「イチ・ニ，イチ・ニ」の声を ったり合わせて る姿に，児童のやる気とチーム一丸となって頑張る姿が見られた。二人三脚では，途中足に結んでいたひもがほどけなくなるアクシデント。でも敵のチームも け寄り，助け合うことができ，もはや敵ではなく，みんなで運動会を楽しむ姿があった。運動会後，振り返りの学級会を行った。

学級会
[議題] 学級目標を実現させるため何が大事か考えよう
[話合い] ①運動会でよかった点は？
②どうして運動会でうまくいったのか。（要因）

集会でよかった点	要　因	
頑張っている子を応援した	㋐	**励ましや思いやりがあったから**
全員で準備，片付けができた 違うチームの子を助けた	㋑	**協力，助け合いがあったから**
チームワークがよかった	㋒	**きちんと話し合ったから**
みんな楽しそうだった	㋓	**笑顔でやったから**
ケンカが起きなかった	㋔	**ルールをみんなが守ったから**
最後まで楽しくできた	㋕	**一人一人が頑張ったから**

③ どの場面でどの要因を目標にするのか

要因㋐	要因㋑	要因㋒	要因㋓	要因㋔	要因㋕
励まし 思いやり	協力 助け合い	話合い	笑顔	ルール を 守る	一人一人 の頑張り

係活動	清掃活動	休み時間	朝･帰りの会
㋑協力 助け合い	㋑協力 助け合い	㋐励まし 思いやり	㋐励まし 思いやり
㋒話合い	㋔ルールを 守る	㋓笑顔	㋑一人一人 の頑張り
㋓笑顔	㋕一人一人 の頑張り	㋔ルールを 守る	
㋕一人一人 の頑張り			

④ 行動の共通目標を決める

日常生活	要　因		みんなで決めた行動の共通目標
係活動	㋑	協力・助け合い	**同じ係同士，困っている係を手伝う**
	㋒	話合い	**係みんなで話し合って計画を決める**
	㋓	笑顔	**係の企画に楽しく参加する**
	㋕	一人一人の頑張り	**一人一人が自分の仕事を頑張る**
清掃活動	㋑	協力・助け合い	**協力して掃除をする**
	㋔	ルールを守る	**ルールを守って掃除をする**
	㋕	一人一人の頑張り	**自分の掃除場所を頑張る**
休み時間	㋐	励まし・思いやり	**友達に優しい声を掛ける**
	㋓	笑顔	**笑顔で楽しく遊ぶ**
	㋔	ルールを守る	**遊びのルールを守る**
朝・帰りの会	㋐	励まし・思いやり	**会が静かにできるように声を掛ける**
	㋕	一人一人の頑張り	**仕事を頑張る。日直の話を静かに聞く**

話合いでは，まず，運動会でのよかった点を挙げた。「頑張っている子を応援できた」ことや「全員で準備から 付けまで，自分たちでできた」こと，「違うチームの子が困っている時に助けてあげた」など楽しかった運動会からよかった点を見付け出すことができた。

次にどうして運動会が楽しくできたのか，その要因を運動会のよかった点を参考にして考えた。「励ましや思いやりの心で声を掛け合えたから」「ケンカにならなかったのは，ルールをみんなが守ったから」「最後まで楽しくできたのは，一人一人が頑張ったから」など，運動会が成功した要因を具体的に話し合うことができた。

そして，その要因を日常生活のどの場面の目標にしていくのか決めた。「協力」は，「係活動や清掃活動でもっと協力し合えればいいクラスになると思う」という意見や，「ルールを守る」は，「清掃活動や休み時間で目標にしたら，もめごとが起こらないと思う」など，学級をよりよくしていくためにどの場面で目標にすればよいか考えることができた。

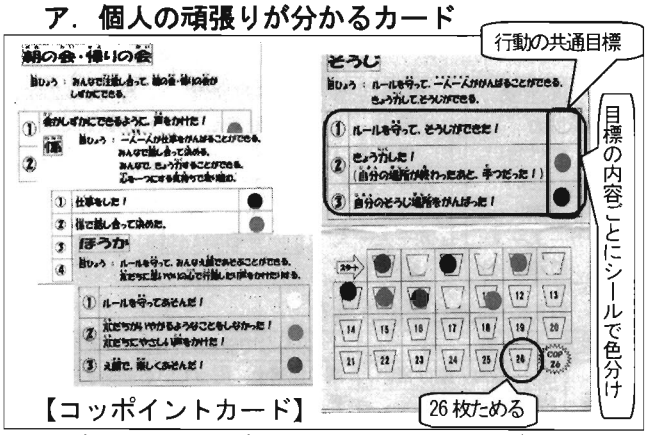
最後に「励まし・思いやり」「協力・助け合い」などの要因は，係活動では具体的にどんな目標にするとよいのか，それぞれの場面ごとに行動の共通目標を決めた。例えば，係活動での「協力・助け合い」は，「同じ係同士が協力し合うことや人手が足りなくて困っている係の人を助ける」というように，どんな行動をすべきか具体的に考えることができた。

そして，日常生活の場面でも全員で話し合って決めた目標を実現させていくことにした。

2　活動経過を視覚化

(1)　目標実現への視覚化

ア．個人の頑張りが分かるカード

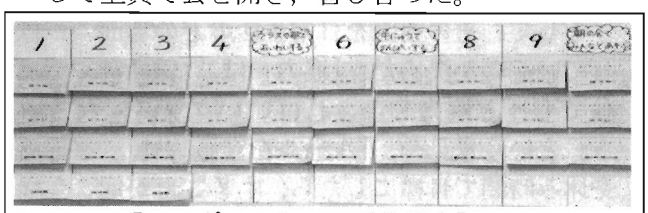


【コッポイントカード】

決めた目標を実現させるためには，意欲を持続させていくことが大切である。

日常生活の場面（係活動，清掃活動，休み時間，朝・帰りの会）ごとにカードを用意し，その中に話し合って決めた目標を入れ，目標の内容ごとにシールの色分けをした。実行できたら，シールをはった。シールは各活動のリーダーや一緒に活動した人からもらうことにした。シールをもらいながら，係で協力してもらえた喜びを伝えたり，互いの頑張りを認め合ったりすることができた。

コッポイントカードに 26 枚のシールがたまったら，掲示板にはっていった。カードがはられるたびに　声が上がり，「○○ちゃん，掃除を頑張っていたもんね」と称賛する声があがったり，「ぼくも頑張ろう」と友達の頑張りに感化されたりする児童の姿があった。またカードが５枚たまると「学級の歌を歌ってお祝いする」，７枚たまると「　　で　杯する」，10 枚たまると「朝の会にみんなで遊ぶ」，15 枚たまると「給食を輪になって食べる」，そして 26 枚たまると「お祝いの会」として全員で会を開き，喜び合った。

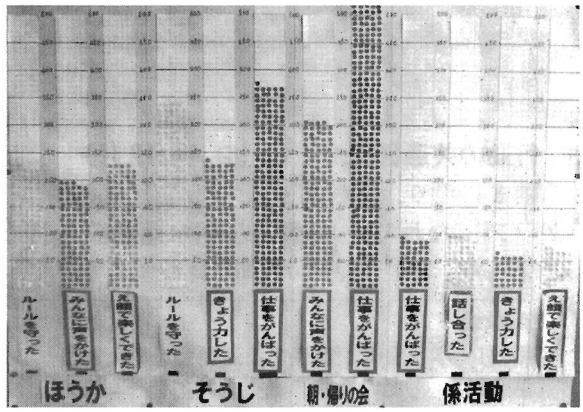

【コッポイントカード集計表】

イ．学級の高まりが分かる教室掲示

コッポイントカードにはられたシールの色でどの目標を実行したか分かるので，全員のシールの枚数を集計し，どの活動のどの目標が実現に近付いているか分かるようにした。（【日常生活の場面別集計グラフ】参照）

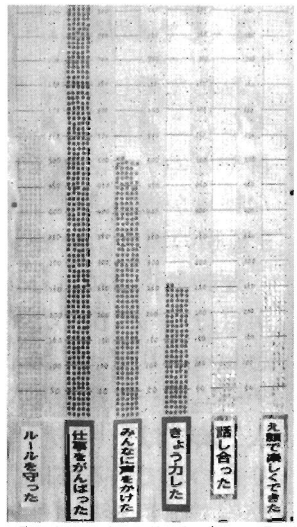
朝の会・帰りの会での「仕事を頑張っている」が多いことから，みんなが日直の話を静かに聞いて会が行われていることや，清掃活動のシールも多いことから，一人一人の働きだけではなくみんなが協力していることなど，学級の成長に気付くことができた。また，係活動のシールが少ないことから，「次は係活動を頑張ろう」と児童同士で呼び掛け，自分たちで学級の課題を見付けることができるようになった。

㋐励まし，思いやり･･･緑　㋑協力，助け合い･････赤
㋒話し合う･････････銀　㋓笑顔･･････････････金
㋔ルールを守る･･････黄　㋕一人一人が頑張る･･･青



【日常生活の場面別集計グラフ】

もう一つのグラフ（【目標内容別集計グラフ】）では，同じ目標ごとに合計し，どの目標が実現できているか分かるようにした。グラフから，「仕事を頑張った」が多いことが一目で分かり，みんなが学級のために役割を果たしていることや「みんなに声を掛けた「協力した」の項目も徐々にシールが増えてきたことから，友達からの励ましの声や協力があるからこそ，一人一人が学級のために頑張れていることも気付くことができた。



【目標内容別集計グラフ】

12 月 21 日までで以下の結果になった。

<コッポイントカードの数>　12 月 21 日現在

係活動	清掃活動	休み時間	朝･帰りの会
3 枚	24 枚	12 枚	27 枚

<各活動でのシールの枚数>　12 月 21 日現在

休み時間		清掃活動		朝･帰りの会		係活動	
ルールを守った	225	ルールを守った	339	みんなに声を掛けた	309	仕事を頑張った	92
みんなに声を掛けた	196	協力した	241	仕事を頑張った	685	話し合った	98
笑顔で楽しくできた	228	仕事を頑張った	372			協力した	61
						笑顔で楽しくできた	73
合計 649 枚		合計 952 枚		合計 994 枚		合計 324 枚	

<各目標のシールの合計枚数>　12 月 21 日現在

ルールを守った	564 枚	協力した	302 枚
仕事を頑張った	1149 枚	話し合った	98 枚
みんなに声を掛けた	505 枚	笑顔で楽しくできた	301 枚

(2) 学級目標実現への視覚化

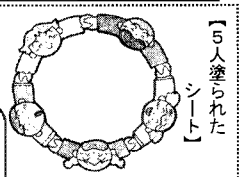
日常生活での活動を視覚化させたことで，一人一人が学級のために役立っていることや，みんなが学級のために　献していることに気付くことができ，学級全体として学級目標実現へと確実に成長していることが分かった。

毎月行われる学級の誕生会では，振り返りシートに学級目標の実現度を個人で評価した。

月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月
平均	2.68	3.52	3.72	3.53	3.68	4.30	4.60
塗った人数							
5人	4	6	6	5	8	13	17
4人	3	7	8	9	10	8	8
3人	7	7	9	8	7	5	1
2人	5	4	2	3	1	0	0
1人	4	1	0	1	0	0	0
0人	2	0	0	0	0	0	0

（※九月から一人転入し26人学級となる）

0人…　よくけんかをする
1人…　自分のことを頑張ることができる
2人…　仲良しの子と助け合える
3人…　みんなで楽しく遊べる
4人…　学級のために頑張り，困っている人を助けることができる
5人…　みんな仲良し，協力し，励まし合っていて，いいクラス



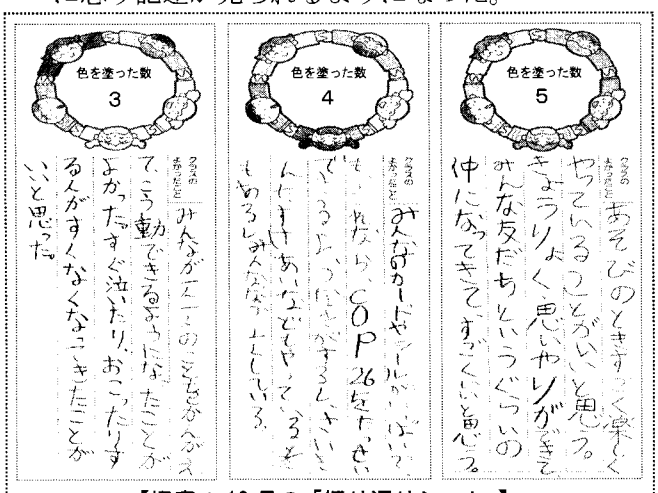
【5人塗られたシート】

信頼し支え合う関係

誕生会の中で何人の人がいくつ色を塗ったのか発表する時間がある。児童はこの時間を大変楽しみにしていた。９月から日常生活での実践を行ったこともあり，10月から４・５人を塗る児童が増えた。徐々によい評価になっていくことを喜ぶだけではなく，３人塗った子が多いことが分かると，「もう少し助け合えるといいよね」と反省する様子も見られた。自分の評価だけでなく，友達が学級をどう思っているかを知ることもでき，学級目標の実現度を確認し合うことができた。

また，「信頼し支え合う関係」は，児童が４・５人を塗ったときだと考えた。12月には26人中25人が学級を満足に思っていることが分かった。

そして，振り返りシートには，日常生活の中で協力できるようになった自分たちの学級を　りに思う記述が見られるようになった。



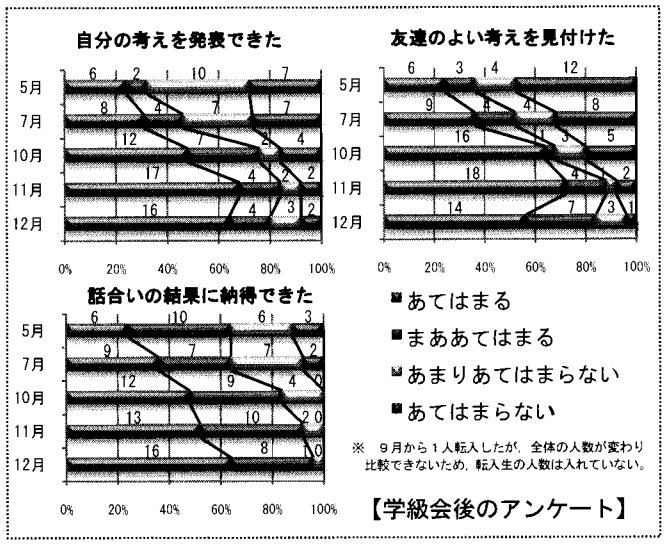
【児童の12月の「振り返りシート」】

3　話合い活動

２学期までで計14回の学級会を行った。

１学期の学級会では，集会の企画を話し合った。話し合ったことを形にしていく経験が増すたびに，自分の考えを発表したり，友達の考えにも耳を傾けたりすることができるようになってきた。

２学期の学級会では，日常生活でも学級目標を実現させるためにどうしたらよいか話し合ってきた。以下は，学級会後に行った児童へのアンケート結果である。10月頃から「あてはまる」「まああてはまる」が増えている。日常実践を大切にしたことで，話合いの中でも，自分の考えが安心して発表できるようになったり，友達の考えのよさを認めることができるようになったり，みんなで決めたことに納得できるようになったりするなど，話合い活動の中でもあたたかな人間関係（信頼し支え合う関係）が育ってきたことが分かる。



【学級会後のアンケート】

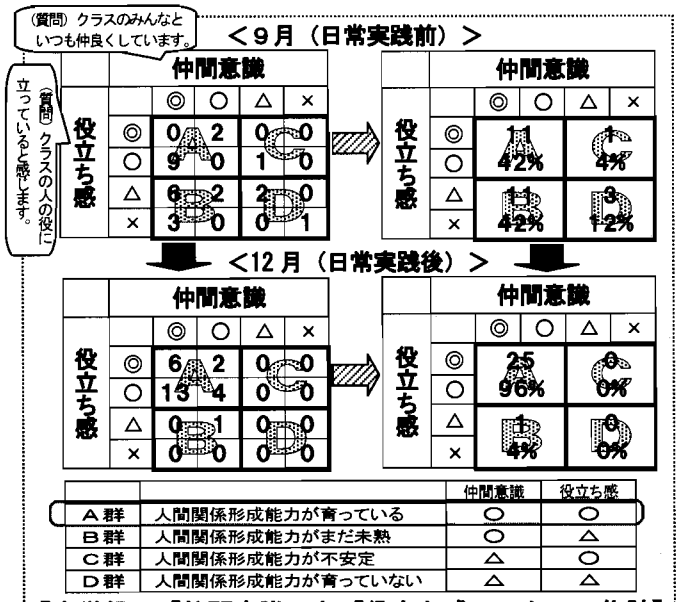
V　成果と今後の課題

あたたかな人間関係を育むために，学級目標の実現に向けて，日常生活の中でも共通の目標を掲げ，実践に取り組んできた。また，互いに信頼し支え合っていることを児童に気付かせるために，児童の行動を視覚化させた。

行動の共通目標づくりでは，集会活動での成功体験から学級目標実現に向けての要因を取り上げ，日常生活で取り組んでいく目標にすることができた。

また，学級目標実現に向けて頑張っている自分たちの行動を，視覚的に確認できるカードを活用したり，その結果をグラフ化させて教室に掲示したりしたことで，自分が学級をよりよくしていく担い手になっていることやみんなもまた学級のために頑張っていることに気付くことができたと考える。

それを裏付けるため，実践中に行ってきたアンケートを集計した。次の表は，日常生活の行動の共通目標を行う前（９月）と実践後（12月）のアンケート結果をクロス集計したものである。



		仲間意識	役立ち感
A群	人間関係形成能力が育っている	○	○
B群	人間関係形成能力がまだ未熟	○	△
C群	人間関係形成能力が不安定	△	○
D群	人間関係形成能力が育っていない	△	△

【本学級の「仲間意識」と「役立ち感」のクロス集計】

子ども本来の姿が現れる日常生活で協力し合うなどの姿が見られることを「人間関係形成能力が育っている」と考えてきた。ある程度同じ学級で過ごした成員ならば，目的をもって行った集会などの特別な場合において，協力するなどの姿は通常見られる姿である。

9月のクロス集計の結果を見ると，本学級と他学級は「仲間意識」と「役立ち感」について同じような結果が見られた。しかし，本研究を進めたことで，本学級はA　へ多くの児童が移行した。これは，学級生活の大半を占める日常生活でも，互いに信頼し支え合うことができるようになったことで，あたたかな人間関係を育むことができる学級になったからだと考える。

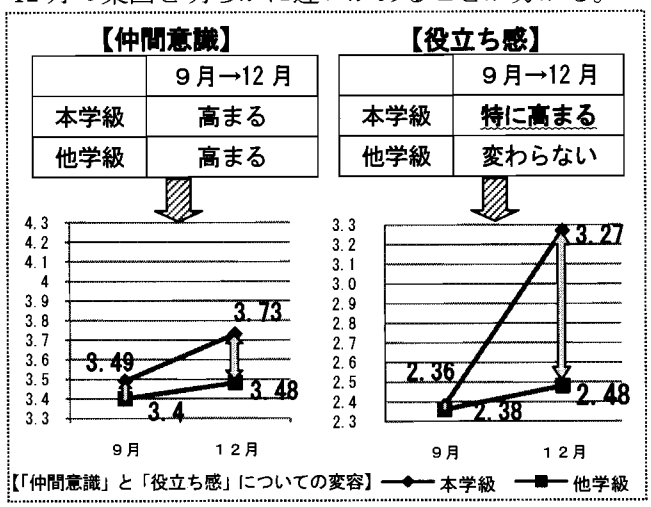
さらに詳しく調べるために，上記の結果を「仲間意識」「役立ち感」のそれぞれを同学年の他学級と9月，12月の　集団に分け，それぞれ違う集団ととらえ独立性検定を行ったのち，比較した。その結果，「仲間意識」に関しては，　集団に有意な差はなく同傾向だった。

しかし，「役立ち感」について，独立性検定P＝0.0018※※で，1%有意であることが分かった。そこで，さらにクロス集計の残差分析を行い，違いをみた。

【「役立ち感」に関するクロス集計の残差分析】

	N 人数	役立っていると思う	まあまあ役立っていると思う	あまり役立っていないと思う	役立っていないと思う
本学級 9月	26	7.70%	38.40%	38.40%	15.40%
他学級 9月	25	8.00%	48.00%	16.00%	28.0%*
本学級 12月	26	**30.8%**※※	**65.4%**※	**3.8%**※※	**0.0%**※
他学級 12月	25	12.00%	36.00%	40.0%*	12.00%
全体平均	102	**14.70%**	**47.10%**	**24.50%**	**13.70%**

残差分析の結果を見ると，本学級12月（実践後）の「役立っていると思う」は，全体平均が 14.7%であるのに対して 30.8%と 1%有意で，明らかに他の集団とは違うことが分かる。また，「まあまあ役立っている」も全体が 47.1%であるのに対して 65.4%と 5%有意，「あまり役立っていない」も全体が 24.5%に対して 3.8%と 1%有意，「役立っていない」は全体が 13.7%に対して，0.0%と，5%有意であることが分かり，いずれも他の集団，すなわち，太枠の本学級12月の集団が，9月の本学級の集団及び他学級9月，12月の集団と明らかに違いがあることが分かる。



以上のことから，次のようなことが言える。

○「仲間意識」について

学級集団の仲間意識については，9月に比べ 12月は成長が見られたが，他の学級における成長と有意な違いは認められず，本研究が仲間意識の成長に大きな効果があることは認められなかった。

○「役立ち感」について

学級集団における集団成員の役立ち感は，特別な指導を行わないと，一緒に過ごす時間が長くなっても高まることはない。本研究のように，役立ち感を向上させるための指導を加えることで，本学級の9月に比べ，12月の集団が違った集団であったとの結果が出たように，集団の変容が見られる。役立ち感は，教師が作為的・意識的に指導していかなければ，高まらないことがわかる。

このことからも，特別に取り上げる場面だけでなく，日常生活の場面でも全員で話し合って決めた目標を実現させていく活動を積み重ねることは，互いに信頼し支え合うことができる児童を育てる上で有効だったと言える。

課題としては，まだB　に一人いることである（「本学級の「仲間意識」と「役立ち感」のクロス集計」参照）。しかし，この児童は9月の時点でD　にいた児童であり，ある程度の効果は認められる。今後はさらに研究を進めていき，A　へ移行していくようにしたい。また，この研究を長期にわたって進めていくと，活動意欲が停滞していく恐れがある。このことから，今後どのような手立てを講じていけばいいか，さらに研究を進めていきたいと考える。

(引用文献)　※1　中央教育審議会答申　平成20年1月
※2　ドミニク・S・ライチェン　ローラ・H・サルガニク
「キー・コンピテンシー　国際標準の学力をめざして」明石書店　2008年
小学校学習指導要領解説　特別活動編　文部科学省　平成20年8月